

群 教 セ	F09 - 01
	平17.231集

ゆたかな学級風土づくりを目指した 正副担任の連携体制の在り方

——副担任の立場を生かしたコーディネーターとしての役割——

特別研修員 馬場 こずえ（県立新田暁高等学校）

《 研究の概要 》

本研究は副担任の立場を生かし学級経営や生徒指導にかかわる上で、正担任との効果的な連携体制をつくることを目指したものである。教育相談的な援助・指導を生徒に行うことで正担任の立場では介入しづらい場面にも対応でき、生徒の心理的ストレスの緩和が期待され、結果的にゆたかな学級風土の形成につながると考えられる。また、正担任と生徒の物理的・心理的ストレスの軽減につながるようなコーディネートを試みたものである。

キーワード 【教育相談 副担任 正担任 連携 コーディネーター】

I 主題設定の理由

現在の高校生は本校生徒も含め様々な問題を抱えており、ストレスの多い生活をしていると思われる。しかし、その援助・指導にはクラスの正担任が全面的に対応していることが多いため、通常の学級経営や生徒指導に支障をきたす場合もある。生徒の抱える問題には、本人を取り巻く環境や家庭的な背景もあることから、状況を理解している正担任以外は介入しにくい場合が多い。そこで、連携体制を確立することが重要であると考え、副担任という人的資源のもつ可能性に着目した。

本校は総合学科単位制高校なので、ほとんどの授業が講座別の実験実習・座学授業であり、クラス単位の授業が少ない。そのため、交友関係も他クラスに広くわたり、教室での孤立化が少ないというメリットがある一方で、クラス内の連帯感を育みにくいというデメリットもある。また、今年度については週1日（年間35日）ではあるが、スクールカウンセラー（以下SC）が配置された。副担任をしているクラスの生徒は3年生（男子18名、女子14名）という事もあり、現在は進路活動を中心に落ち着いた学校生活を送っている。クラス内には少人数のグループがいくつかあり、男女とも、そのグループでの交友を中心に生活している。同じクラスの生徒といえども介入できる隙がなく、閉鎖的な印象をもつ。また、グループ内での人間関係は、教師が思っている以上に希薄であることが、生徒とのやりとりの中で感じられる。ただ、クラスへの帰属意識はあり、クラス全体の雰囲気

も明るい。現在は目立ったトラブルもなく、平穏であるが冷めている印象を受ける。

そこで、副担任の立場を生かし、コーディネーターとして、正担任と連携を密にするとともに、必要に応じてSCや養護教諭とも連携を図りたい。このように、生徒に対して連携による効果的な援助・指導をしていくことが、ゆたかな学級風土の構築につながるものと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

正・副担任の連携体制を軸に、生徒の成長を促す援助・指導を行うことで、生徒の抱える諸問題を解決へと導く。また、SCや養護教諭、保護者との連携も図り、コーディネーターとして包括的な生徒理解を行うことで、ゆたかな学級風土づくりを目指す。

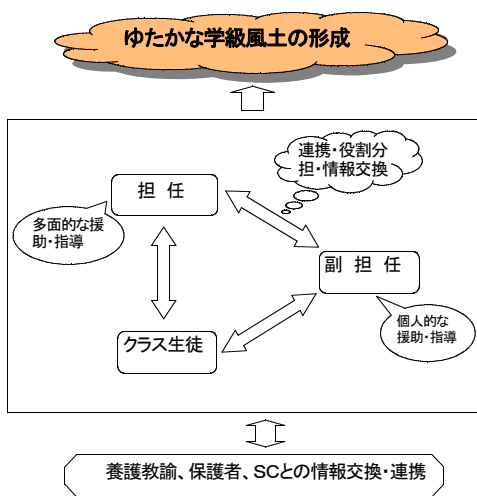
1 研究の見通し

- 生徒の情報収集を徹底し正確に分析することで、正担任との連携体制をつくる際、より効果的な体制を作ることができるであろう。
- ショートホームルーム（以下SHR）や清掃活動などを媒体とし、通年で生徒と積極的にかわることで密な関係づくりができ、生徒から副担任としての認知が高まり、また、生徒の思いや願い、小さな変化に対し迅速に対応できるであろう。
- SCや養護教諭と密に連携を取り、情報を共有

することで、学校全体の実態把握や、副担任の立場では見えない生徒の様子を知ることができ多面的な生徒理解ができるであろう。

- SCを講師に招き校内研修会を行うことで、教育相談の重要性を全職員が理解し様々な場面で実践してくれるであろう。また、SCの積極的な活用に結びつくであろう。
- クラス対抗の学校行事などに副担任として積極的に参加し、応援や声掛けを行い、掲示物などを作成することで、生徒の連帯意識や帰属意識が増し、ゆたかな学級風土づくりの形成につながるであろう。

図1 研究の基本構造図



Ⅲ 研究計画

1 前半(5月～8月)

- (1) 徹底した情報収集と現状把握
 - 正担任からのクラス概況説明を依頼
 - 生徒の1、2年次の出欠状況の調査
 - 保健部からの情報提供依頼
 - SC日より、教育相談だよりの発行（教育相談主任として）
 - 教育相談週間の実施と利用の呼びかけ（教育相談主任として）
- (2) 主な活動内容
 - 毎月、欠席5回以上の生徒を対象に、正担任との情報交換を行う。
 - 日常的な生徒との関係づくり（SHRなど、清掃活動、放課後など）
 - 心理テスト、第1回学級の雰囲気把握する質問用紙（中学生用）などの実施と結果分析

- 気がかりな生徒、相談を持ちかけてきた生徒について正担任と連携し援助・指導
- クラス参加型の学校行事（体育祭や球技大会など）での応援とその後の掲示物づくり
- 進路指導への積極的な参加を通して、生徒理解を深め、生徒の思いや願いを把握
- 必要があれば家庭訪問への同行
- 養護教諭、SCとの連携
- 校内教育相談研修会講師をSCに依頼し開催（教育相談主任として）

2 後半(9月～11月)

- (1) 実践の総括に向けて
 - ふたたび第2回学級の雰囲気を把握する質問用紙の実施と結果分析
 - 副担任懇談会を行い、実施内容の発信による理解の促進
 - 正担任との意見交換会実施
 - 実践のまとめ
- (2) 主な活動内容
 - 前半の活動を継続
 - 「悩み相談カード」の実施と集計（教育相談主任として）
 - 卒業を意識させる学級経営について、正担任との連携による卒業期における学級経営の充実

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

- (1) ゆたかな学級風土について

本研究で目指しているゆたかな学級風土とは、生徒一人一人がお互いを思いやり、助け合い、成長し合える場である。
- (2) コーディネーターについて

本研究におけるコーディネーターの在り方について、次のように考えた。副担任として、正担任との連携を軸に生徒の援助・指導を行う。また、必要に応じて、養護教諭、保護者、SCとの情報交換を中心とした連携も行う。教育相談主任として、本研究での実践や内容を学年や学校全体で共有できるように情報発信を行う。
- (3) 連携について

正担任との連携体制を核とした情報連携を徹底して行う。養護教諭や保護者、SCからの情報も共有し合う。また、清掃活動時やSHR代行、学校行事などでの行動連携を徹底する。

2 現状把握

(1) 1、2年次出欠状況、及びクラス内アンケート結果より

生徒在籍数は2年次の方が少ないが、欠席、遅刻、早退の総日数は2年次の方が芳しくなく、また、1年次の出欠状況も良いとは言えない状態であった。謹慎指導による欠席も含まれており、そのことから、問題行動の多さも伺えた。クラス全体として落ち着いた雰囲気ではなかった。

クラスと学校生活に関する簡単なアンケートでは、男女ともクラスや学校生活について「不満はない」という結果であった。しかし、クラスの4割が何らかの悩みを抱えていることが分かった。男女による違いがあり、男子は進路関係、女子は友人関係での悩みが多いことが分かった（平成17年6月実施）。

クラスとして全体的に前向きな雰囲気ではなかったが、2年次の途中から出欠状況は改善されており、現在は目標の進路実現に向けて、個人個人が奮闘中である。クラスへの帰属意識は高いように見受けられるが、未だにクラス内の連帯感は希薄である。

(2) 正担任との情報交換を通して(正担任からの要望)

副担任がクラスにかかわる上での注意点や希望を担任と本音で話し合った。

- 正副担任の役割分担がはっきりしていると指導しやすい（担任が強い指導をしたときのフォローや担任の立場では言いづらいことを伝えるなど）。
- 正担任と同じ価値観で生徒に援助・指導して欲しい。また、担任と歩調を合わせて欲しい（援助・指導が行き届かなくなるので。また、生徒の混乱を防ぐためにも）。
- 生徒に対してアプローチを変えて援助・指導して欲しい（目標は同じであっても、やり方を変えて接して欲しい）。
- 正副担任同士でのコミュニケーションを積極的にとるように心がけて欲しい（連携しやすい雰囲気づくり）。
- 生徒一人一人の話を、よく聞いてあげて欲しい（正担任には言えないことを聞いてあげて欲しい。また、正担任の立場では助言しにくいことをしてくれれば助かる）。
- ◎ クラスの生徒を、個人として面倒を見て欲しい。（副担任だからこそできることをして欲しい）。

い。正担任が行うと平等性を欠く場面もあるため）

3 実践

(1) 通年で行ったもの

ア SHR代行を通した生徒との関係づくり、コーディネーターとしての連携

1回（水曜日）朝、帰りのSHRで正担任の代行をする。4月当初は、生徒の副担任に対する認知が低かったためか、SHRの進行などに戸惑いの様子も見られたが、すぐに受け入れてくれた。また、SHR終了後、男女問わず声をかけてくる生徒が多くなった。SHR後、正担任と情報交換を行い、出欠状況や生徒の様子などを通して、その後の連携体制について話し合いをもった。

イ 清掃活動を通した生徒との関係づくり

本校では昼休みに清掃活動を行っており、生徒は概ね清掃分担場所へ行き、班別で掃除を行う。自分の清掃分担場所は副担任のクラスの生徒が担当なので、短い時間ではあるが、少人数で話をしたり、じっくりと観察ができる。なるべく名前を呼び、声をかけることで生徒とのコミュニケーションを取ることができ、チャンス相談もしやすい。他愛のない日常的な会話から、本人の趣味や興味をもっていること、進路や友人関係のことなど情報収集が行えた。必要に応じて、正担任に情報の提供を行った。

ウ 放課後の教室での生徒との関係づくり

SHR代行の後に、教室に残っている生徒と話しをしてみる。放課後ということで生徒はリラックスしており、笑顔も多く良い表情をしている。こちらから声をかけても快く対応してくれた。また、相談したいと言ってくる生徒もいた。

SHR代行でない時も、放課後クラスに出向いてみた。だれも残っていない時もあるので、掲示物の整理、机の整列、簡単な掃除などを行い、教室の美化に努める。生徒からの感謝の声もあった。

エ 毎月、欠席5回以上の生徒の調査（コーディネーターとしての連携）

完全に不登校になってしまった生徒がおり、家庭訪問を実施した。そのほか、不登校傾向の生徒もいるので、正担任と連携を取り、生徒に出席を促すような支援を行った。1、2年次に比べ出欠状況は飛躍的に改善されており、進路と卒業を意識した生活をしている様子が伝わってきた。

(2) 前半で行ったもの

ア 第1回学級の雰囲気把握する質問用紙の集計結果(図2参照)(生徒の観察、理解)

○ 男女とも「学級の不和」を感じているようである。

○ 「学級の自由」「思いやり支持」のポイントでは男女で開きがあり、結果的に男子よりも女子の方が「学級の不和」を感じている事が分かった。現状把握で行ったクラス調査で、女子の悩み事のほとんどが友人関係だったことと関係していると思われる。

イ 球技大会を通しての活動(クラス生徒との関係づくり、コーディネーターとしての連携、ゆたかな学級風土づくりのための活動)

同時開催の試合が多かったので、正担任と分担して写真撮影や応援を行った。また、出番待ちの生徒に声掛けをしてたくさん会話をもった。男女とも明るい表情でいきいきとしていた。運動能力の高い生徒が多いためか、結果的に総合優勝となった。その後、できあがった写真を使い、球技大会のダイジェストを壁新聞風に教室に掲示してみた。作成に当たっては生徒にも写真選びや飾り文字など手伝ってもらい好評であった。また、賞状にもデコレーションをして欲しいと正担任から依頼があり、手を加えてから教室に掲示した。両方も生徒から見やすい教室前方に掲示し、クラスの連帯意識の高まりを促そうとした。

ウ 校内教育相談研修会をSCに講師を依頼し実施(教育相談主任としての情報発信活動)

7月に実施した。本校SCは地元の中学校にも勤務していることから、現在の中学生の様子や実態と、本校生徒との面談でのエピソードを中心に研修会を行った。また、教育相談でよく使われる用語(LDやADHD、アスペルガー症候群など)の解説とその特徴等の研修を行った。質疑応答では、正担任からの生徒の動向に関する質問もあり、有意義な研修会となった。

エ 三者面談での情報を正担任から聞く(コーディネーターとしての連携、生徒の観察・理解)

夏休みに入ってから三者面談が行われ、3年生という事で進路関係が中心の面談となった。面談は正担任、生徒、保護者で行われたため、面談後、正担任からそれぞれの生徒の進路関係や家庭での様子を聞いた。また、面談終了後の生徒、保護者と偶然行き会うこともあり、直接話をできた

保護者も数名いた。その様子も、正担任に報告し、その後の指導に役立ててもらった。進路については、クラスのほぼ全員が明確な目標をもっており、保護者も納得しているようだ。

(3) 後半に行ったもの

ア 悩み相談カード集計結果(生徒の観察・理解)

夏休み明け、LHR時に全校生徒を対象とした悩み調査を行った。調査は「悩み相談カード」を用いて行い、悩みが記入されている生徒に対し、その後声かけを行った。生徒からは悩みはあがってこなかった。

イ 進路指導にチャンス相談を生かす(生徒との関係づくり、コーディネーターとしての連携)

進路指導の一環として、生徒の面接練習や作文指導、入学願書作成の指導を行いながら、卒業後のこと、今までのことなど、雑談を交えながら、個人的に話し合えた。初回は緊張していた生徒も、慣れてくると受け答えが上手くなり、上達した部分を褒める事で生徒自身、自信が付いたように感じられた。また、正担任との情報交換を行い、生徒の様子から、個々の生徒に対する連携体制の確認なども行った。

ウ 集団ゲームを活用した活動(ゆたかな学級風土づくりのための活動、コーディネーターとしての連携)

体育大会の前に、クラスの団結と親睦を深めるために、体育館で集団ゲームを行った。担任にも入ってもらい、LHRの時間を使って行った。集団としてのまとまりや、今まで、このようなトレーニングをした経験が生徒にも自分にもないため、構成的グループ・エンカウンターではなく、運動量が多く遊び的要素の強い集団ゲームを行うことにした。

まず、バースデイラインを行い、誕生日順に4班に分け、その4班で「うちわ風船リレー」を行った。同じ班のメンバーを励まし、応援するように伝えた。2回目は、今朝起きた時間順に並び、早い順から4班に分け、再び「うちわ風船リレー」を行った。

1回目は上手くコミュニケーションが取れなかった生徒も、体を動かした後の2回目にはスムーズに行動できた。単純なゲームなので高校生の彼らにどう思われるか心配だったが、行ってみると、意外と熱心に楽しんで取り組んでいた

安心した。最後に、今日行った事が体育大会で生かせる事を期待しているので頑張るよにとエールを送った。後片付けを進んで行ってくれた生徒もいた。

生徒からは「ふだん話さない子とも話せた」「割と楽しかった」などの感想を得た。担任からは「クラス内の見えない人間関係がよく分かったので参考になった」という意見を得た。

エ 体育大会を通して（生徒との関係づくり、コーディネーターとしての連携）

前半の球技大会の時と同じように、正担任と分担して写真撮影や応援を行った。また、出番待ちの生徒に声掛けをしてたくさん会話をもった。男女とも明るい表情でいきいきとしていた。クラス対抗の「全員リレー」で優勝したり、多くの生徒が参加した綱引きの競技前に円陣を組んだり、クラス全体として盛り上がっていたように思われた。

オ マラソン大会を通しての活動（生徒との関係づくり、コーディネーターとしての連携）

マラソン大会の約1ヶ月前から体育の授業で練習を行っているので、得意な生徒には自己ベストタイムを聞いたり、得意でない生徒には励ましや相談に乗るなど、マラソン大会の話をきっかけに、声掛けやチャンス相談を行った。クラス対抗でもあるので、高校生活最後のクラス参加型行事としての意識をもたせるべく、意識的に会話に盛り込んだ。

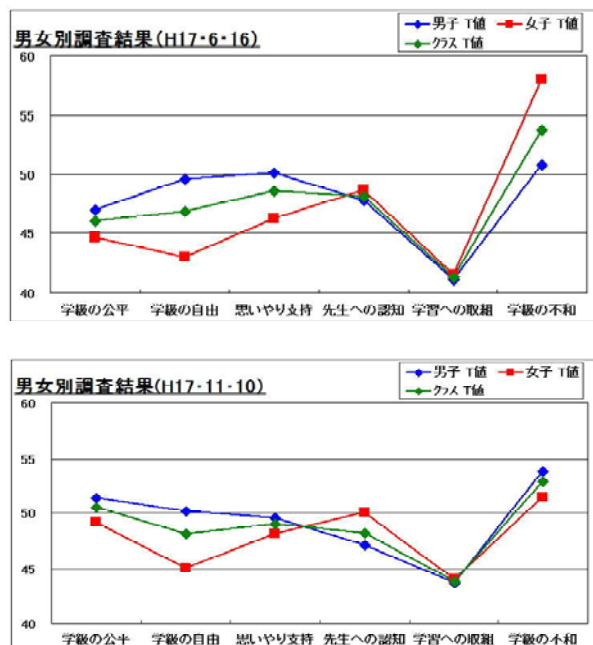
当日、沿道から声援を送ると、皆一様に笑顔で声援にこたえてくれた。参加生徒の全員が完走できた。

カ 第2回学級の雰囲気把握する質問用紙の集計結果（図2参照）

- 「学級の公平」が約5ポイント上がった。
- 「学級の自由」「思いやり支持」では女子のポイントが上がったため、結果的に上がった。男子では大きな変化は見られなかった。
- 「先生への認知」についてはばらつきが見られた。
- 「学習への取組」が約4ポイント上がった。これは、生徒自身が卒業を強く意識しだした事と、進路指導の際の、作文練習や面接指導による効果の表れではないかと推測される。
- 「学級の不和」では、全体的にはあまり変化が見られないが、女子のみのポイントに注目すると、約5ポイント減ったことになる。

- 前回同様クラスに関するアンケートも行ったが、女子の悩み事の大半を占めていた友人関係が、ほぼ解消されていた。上記の「学級の不和」のポイントが下がった事と直接関係していると思われる。

図2 学級の雰囲気を把握する質問用紙集計結果



キ 副担任会議の実施

今まで、自分がモデルクラスに対して行ってきた取組を説明し、それぞれの担当クラスでの役割分担や正担任との連携体制について本音で情報交換を中心に会議を開いた。その中で上がった主な意見・感想は以下のとおりである。

- 3学年ということで、正担任がクラスを持ち上げるのが基本ということもあり、副担任としての役割の大半は、正担任不在中の担任業務であった。
- 副担任は持ち上げではないので、どこまで生徒に関わっていいのかが判断が難しい。翌年、自分が別学年の正担任になったら、その事で手一杯になり、深く関わった生徒に中途半端な指導で終わってしまう結果になるのではないかと。
- 総合学科単位制ということで、クラス単位の授業がLHRくらいしかない状況で、クラスとしての集団意識が低いのは仕方のないことではないかと思われる。担任との役割分担を余程しっかりしておかない限り、副

担任がクラス運営に表立って関わりすぎると、生徒は混乱してしまうのではないか。

- 学校の体制にもよるが、理想としては、正担任は父親役、副担任は母親役という具合に役割分担できるのが良いと思われる。正担任はクラス生徒全員に対して平等性が問われることが多く、厳しくなることが多いので、副担任が生徒の思いを十分に聞いてやり、諭して、納得させるというような連携体制が理想的である。
- 正副担任の相性が大きく関係するため、生徒の関係するトラブルが原因で正副担任間に摩擦が生じてしまう事を避けるためにも、密なコミュニケーションを通して意思疎通を心がけることが必要と思われる。

ク

正担任との情報交換

正担任の立場から、副担任のこのようなクラスについての取組や実践を通して感じた事や意見などを話し合った。結果、以下のような意見や感想があがった。

- 学級経営や生徒指導をする上で、正担任として、気持ちに余裕ができた。
- 気持ちの切り換えが上手くいくようになり、日々むらなく生徒に同じ調子で指導ができた。感情的になるなど、生徒にとってはマイナスの動作を極力見せずにすんだ。
- クラスの状態が乱れてきたときなど、SHRなど、正担任が来るはずのところをあえて副担任が代行することで、生徒に問題提起をすることができたのではないか。副担任からの投げかけで、クラスや個人の問題点の気づきに繋がったように思われる。
- こういう連携もあるのかと新鮮に思った。
- 副担主導の行事（この中で言う集団ゲームなど）のとき、正担任主導の時と明らかに生徒の動きが違い、自分としては指導を入れたい部分もあったので、関わりに困った。
- 正担任と副担任の相性の問題が大きいので、今回に関しては、非常にやりやすく感謝している。しかし、同じ事を別の正副担任で実践した場合、必ずしもよい結果に結びつくとは限らないと思われる。

V まとめと今後の課題

研究を進めていく中で強く感じたことは、副担任として学級経営にかかわること自体は決して難しいことではないが、どこまでかかわるかという点が非常に難しいということだった。特に、生徒と密な関わりをもった場合、それにより事態が好転する場合も悪化する場合もあることから、正担任の負担を逆に大きくしてしまう恐れもある。よって、正担任からの具体的な要望があれば、それに添うように働きかけをしてきたという自分の経験を振り返った。つまり、受動的な働きかけを行っていたということになる。

今回の場合、正担任の理解があったこともあり、副担任として能動的に働きかけを行うことができたのだが、概ね良好という結果であり、完全なものではないと推測される。

正担任と副担任、正担任と生徒、副担任と生徒というように、感性の異なる人間が多数集まりクラスを構成しているので、一概にこうでなければいけないという正解はないのではないだろうか。

そして、一人一人が異なるからこそ、他者理解を正確に行う必要があり、それにはコミュニケーションが必須であると改めて実感した。正担任と副担任の間で援助・指導に違いがあると、生徒が混乱してしまうため、矛盾のない連携体制や役割分担を考える際には、まず、正担任と副担任がお互いを受容し方針や考えを理解することから始めるべきであろう。

今回の場合、コミュニケーションをとることにより、正担任の物理的負担や心理的負担も軽減され、生徒からの心のサインにも余裕をもつて対応できたのではないかと思われる。

学級集団や個々の生徒と体験を共有し、正確にそれぞれの意思を理解することで、アプローチの方法は様々であるが、正担任・副担任の個性を生かした援助・指導を学級に対して行うことができ、今回の実践とは異なる学級経営、さらに、ゆたかな学級風土づくりが行えるだろう。

今後は、本研究の内容を学年だけでなく、学校全体で共有できるように情報発信、継続的実践をしていきたい。

(担当指導主事 野村 達之)